



陽気だより

No.78

2013.9.15

●ホームページからも「陽気だより」
最新号・バックナンバーをご覧ください

<http://yotokusha.com/>

図書出版 養徳社 〒632-0016 天理市川原城町 388 TEL 0743 (62) 4503 / FAX 0743 (63) 8077

養徳社

検索

第9号 (昭和25年2月号) から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で64年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

唄

高野友治

(天理大学名誉教授 一九〇九・二〇〇三)

越後のT町へ行ったとき、この大工の棟梁さんから馬子唄を聞いた。その唄の文句は、

碓氷峠の鳥がないて、
嬢の身持が気にかかる

というのであった。唄もよかつたが、棟梁さんの声もよかつた。また、その環境もよかつた。それは十一月の半ば頃で、上越の山々の上には灰色の雲が低く垂れ込めて、長い冬ごもりの暗さを知らせておった。その日は、教会の大祭で、信者さんたちが沢山あつまり、その夜の直会の場であつた。戸外には音もなく細い雨が降っていた。広い教堂で、みんなが車座になって、次々と唄うのである。

この唄を、棟梁さんのサビのある声で聞いていると、肃々たる碓氷峠の景色が頭の中に浮かんでくる。馬の鈴の音がきこえてくる。新婚の恋女房を麓の家において出稼ぎして

いる馬子の切ない心中が、あたかも自分の心中であるかのように感じられて、何とも云えんしんみりした気持ちになつた。

唄は、やはりその土地へ行って、その土地の人に聞かねば本当の味わいを味わうことは出来ぬと思う。勝太郎(昭和に活躍した女性歌手)の「おけさ」



もよいが、佐渡へ行って、暗い野道で遠くの村から聞こえてくる「おけさ」踊りの太鼓の音を聞く方が、本当の佐渡らしい感じが出る。馬子唄も、この上越の山の中で、大工の棟梁さんから聞いていると、自分が、暗い封建社会の馬子であるかのような気持ちになつ

て、何とも云えん味がある。大和の老農中村直三が山形県へ農事指導に行っていたとき、たま〜、

親は長崎子は松前で
はなればなれで苦勞する

という追分節を聞いて、そぞろに大和の妻子の身を思うて涙したという。馬子唄とか追分節のような淋しみのある唄は、やはり、灰色の雨雲におおわれた北国の地に聞いた方がよい。唄はその土地のお

鳥のごとく清水峠を越える。大工などは、年中関東に働いて、盆と正月に妻子の許へ帰ってくる。これもやはり旅鳥である。その旅は決して楽なものではない。

北山時雨れて越後は雪かあの雪消えなきや帰られぬ早く行きたいあの山越えて娘来たかと言われたいなどの、この地方の民謡が、この辺りの消息を物語っている。

先祖伝来、そうした切ない旅の辛さ、悲しさ、淋しさが、この土地の人々の血潮の中に流れてきたものであろう。その切なさ、そのはけ口を見つけて吐き出されたのが、この地方の民謡となったものであろう。そこに、その地方人によって、その地方の唄がうたわれるところに、本当の唄の味わいが出るのであろう。

産である。十一月の末には雪が降る。五月の鯉職は雪の中に立てる。一年の半分以上は雪に埋れた生活で、男でも女でも、多くは清水峠を越えて、雪のない関東へ稼ぎに出たのである。江戸へ餅つき、風呂屋へ三助、越後獅子、毒消売など、雪が降り出すと、渡り

和歌山へ行って串本節を聞いたことがある。ここでは、あの終りのハヤシを「いいじやないか、いいじやないか、いいじやないか」という。幕末の勤王運動の一つの手段として、お伊勢詣りを流行させたころの産物で、「いいじやないか〜、なんでもいいじやないか」と

うたつて伊勢へ抜け詣りしたとき唄われたものだという。黒潮の流れる紀州沿岸の地一帯は、日本で最も陽気はなほだしい処で、風光も明媚で、気分も情熱的な処である。その情熱的な紀州ツ子のうたうこの唄は、北国の唄とは対蹠的に、また格別の味がある。

また、聞く私が越後生まれであるだけに、情愛相一致するところがあるためもある。私の母方の祖父は、殆ど晩年まで会津で大工をしており、盆と正月だけに越後の妻子の許へ帰っていたという。

ただし、私は大和に二十六年住む。近頃次第に哀調がきらいになってきた。大和の土地に哀調がないためであろう。それにしても、大和の土地の性格を特徴する大和独特の唄のないのは淋しい。また、苦痛がないから唄らしい唄がないのかも知れない。

大和の自然や人情の中には、遠い昔の名鐘の余韻が今も嬾々として流れているような感じがする。茜色の夕焼を見るがごとき色彩感をおぼえる。そうした気分の自己表現としての唄が、どこかに残っているような感じがしてならない。



火器なしのコーヒー沸かし

ニューヨーク・コニンググラス工場の技師ロバート・ダルトン博士は、電気良導体性の特殊塗料をぬったコーヒー茶碗を考案した。この茶碗にちよつと電気を通ずると、たちまち温かいコーヒーが出来るというわけ。この特殊塗料は薄い透明な、しかし非常に凝集力とねばりを持ち、一オームから一万オームまでの種類の電気抵抗を生ずるといふ特性がある。この塗料の応用は将来非常に広範囲なもの

となるだろうと、同博士は語っている。

鳥捕えの名人

オーストラリアの北端、クイーンズランドのフィッロイ川のほとりに、珍鳥フィンチ（ヒワ類の一種）捕りの名人が住んでいる。スミスという豪州人とアダと呼ぶ原住民の女、オトリ籠で野鳥を巧みに捕らえるのだが、アダは鳥の鳴声にかけては正に天才、また、その巢を見つけるカンは百発百中。最近の三カ月間に、なんと二十四万羽のフィンチを捕らえたというから驚く。捕鳥後、一兩日中には空輸で南豪州の鳥屋さんの手に渡る。二人は仲の良い共同業者として、素晴らしく豊かな暮らしをしている。

『陽気』定期購読

◎お店まで買いに行くのが大変。忙しくて購入し忘れた。定期購読はそんな手間を省きます。

毎月20日前後にご自宅宛に発送いたします。

(例：10月号は9月20日) まずはお問い合わせください。

購読料金

1年分…3,200円 (12回分の送料込)

購読に関する問合せ先

0120-920-398

養徳社 業務部窓口

月刊『陽気』
連載小説「まほらま」
作家出久根達郎作

特設サイト公開中!!

◎筆者出久根達郎氏のメッセージをはじめ、これまでのあらすじや立ち読みなど、『陽気』本誌と連動したコンテンツを続々配信中。

<http://mahorama.yotokusha.com/>

陽気 まほらま
検索

Facebook で最新情報をチェック! <https://www.facebook.com/yotokusha>

<書籍・陽気のご購入方法について>前払いでお願いしております。お近くのゆうちょ銀行に備え付けの振込用紙をお使い頂き、[住所、氏名、電話番号、書名(陽気希望月号)、冊数]を明記の上(振替口座番号00990-3-17694番 加入者名 養徳社)へご送金ください。手数料はお客様負担となります。ご入金を確認後、速やかに商品を送送させていただきます。ご不明な点は養徳社までお問い合わせ下さい。フリーダイヤル0120-920-398 養徳社 業務部